松本清張文学の台湾における伝播と受容

李　彦樺

一、はじめに

日本の文学作品は、長い間台湾でも親しまれてきた。翻訳作品が文学出版市場で大きな割合を占めている台湾では、台湾人作家より読者に親しまれる外国作家は数多くいる。松本清張は、まさにその一人である。台湾人は、松本清張の作品を読んだことのない人でも、名前ぐらい知っている人は多くいる。その松本清張の作品が、今までどういう風に台湾に伝播され、その受容が時代と共にどのように変貌してきたのかを、本稿は資料調査を手がかりに、明らかにしていく。

本稿は三章に分けて論じたい。すなわち、一、台湾における推理小説という文学ジャンルの発展過程と状況。これは松本清張から受けた影響に絡む問題なので、まず最初に簡単に紹介したい。二、松本清張とその作品が実際に台湾に伝播・受容される状況。これは60年代・70年代・80年代・90年代・2000年以降に分けて、筆者が集めた書籍資料・出版資料などに基づいて考察する。三、松本清張が台湾の推理小説界や台湾作家・文化人に与えた影響。これは、筆者が集めた台湾人作家・出版業界関係者などのコメントや文章から考察する。

以下、本論に入る。

二、台湾における推理小説の発展と状況

世界史上初の推理小説はエドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe）が1841年に発表した「モルグ街の殺人」[1]と言われているが、台湾での最初の推理小説は、さんぽんが1898年から『台湾新報』で連載した「艋舺謀殺事件」とも、林熊生が1941年に『台湾警察時報』で発表した「船中の殺人」とも言われる[2]。この時期の台湾はまだ日本の植民地である。日本では黒岩涙香の翻案小説や探偵実話などが流行り、台湾にいる日本人もその影響を受けて、新聞や雑誌に探偵実話を発表した[3]。これらの作品の共通点としては、まず第一に、発表地が台湾であるが、作者が台湾にい

る日本人であり、そして作品は日本語で書かれたものである。たとえば「船中の殺人」を発表した林熊生は名前からして台湾人だと思われがちだが、実はこれはペンネームであり、本人は金関丈夫という名前を持つ日本人である。陳國偉の「本土推理. 百年孤寂　台灣推理小說發展概論」(『文訊』269 期、2008 年 3 月) によれば、当時『台法月報』、『台灣警察協會雜誌』、『台灣警察時報』などの雑誌に発表された探偵実話や犯罪実話的作品が数十点ぐらい存在するのである。

台湾人が書いた最初の推理小説は、葉歩月が 1946 年に発表した「白昼の殺人」である[4]。これは戦後間もなくの時期に発表された作品なので、葉歩月は日本人ではなく台湾人なのだが、使用言語はやはり日本語である。呂淳鈺の「白晝殺人　葉歩月與偵探小說」(『文訊』269、2008 年 3 月) によれば、この小説は出版されて 2 ヶ月も経たないうちに再版された。相当な人気があった様子が窺える。

以上のように、日本統治時代から戦後しばらくの間は、台湾は日本の推理小説の風潮に追従して、すこしずつであるが推理小説に向けて関心が芽生えてきたのである。

しかしその後、台湾においての推理小説というジャンルは下火になった。特に中華民国政府 (今台湾の政府) が 1949 年に中国共産党との内戦に負けて台湾に移転して以来、推理小説の創作や外国作品の翻訳は低潮期を迎えた。これは政府の文学政策[5]や、中国共産党との戦争に備えるために実施した戒厳政策[6]のためだと思われる。

この空白の状態は、約 20 年間続いた。この間の推理小説といえば、東方出版社が 1950 年代に翻訳出版したコナン・ドイルの『シャーロック・ホームズ』シリーズ (台湾版のタイトルは『福爾摩斯探案全集』)、モーリス・ルブランの『アルセーヌ・ルパン』シリーズ (台湾版のタイトルは『亞森羅蘋全集』) ぐらいである。金儒農の「喧囂以前　台灣推理小說出版概況」によれば、「この二人の名探偵と怪盗は台湾読者の推理小説への第一印象」[7]である。

1960 年代から 1980 年代頃まで、雑誌『偵探』が発行されていた。この雑誌『偵探』の内容は、殆ど欧米からの翻訳推理小説だが、翻訳の品質が悪く、原作者は伏せられていたので、台湾人の推理小説の創作への刺激は殆どなかった。その証拠に、この時期の台湾人による推理小説の創作は皆無である。

1980 年代以降、ようやく台湾人が書いた推理小説が現れた。1984 年、林佛兒が書いた『島嶼謀殺案』[8]は、台湾人が中国語を使って創作した最初の長編推理小説である。葉歩月が戦後まもなく出版した『白昼の殺人』は日本語による作品なので、

偵探　第二二七期　六月號
總號第640期
DETECTIVE MAGAZINE　本期目錄

4　假假薛米琪……薛米琪偵探奇案……盧塗譯
35　生死之交……偵探驚險故事……小黑譯
46　湖底之謎……偵探迷情故事……淑珍譯
70　頑石之戀……偵探怪聞故事……龍飛譯
78　四屍案……偵探奇情故事……陸源譯
95　無言的告白……偵探幽默小說……黑人譯
108　單位的熱情……日本偵探故事……王志譯
125　信件炸彈……偵探機智小說……大奎譯
138　中途下車……偵探異聞故事……孟秀譯
153　別有洞天……偵探故事精華……必成譯
156　誰是兇手……偵探奇案選粹……陸源譯
176　桑鳩……偵探詭異小說……秋凡譯
180　世外桃源……偵探靈異故事……曉紅譯
195　打賭……偵探趣聞故事……瀟瀟譯
198　離婚學入門……偵探諷刺小說……子遠譯
214　薔薇的刺青……神津推理專輯……常賢譯

・3・

266731

図1　雑誌『偵探』227（総号640、1984年6月）

約40年後の林佛兒の『島嶼謀殺案』が中国語による最初の長編推理小説である。このことについては、林佛兒が「一顆孤單又輝煌的寶石—推理小說的必竟之路」（『鹽分地帶文學』19期、2008年12月）の中で言及している。筆者の調べた限りでは、その40年間には、推理小説は殆ど書かれていないので、まさに空白の40年間と言えるだろう。文芸評論家兼編集者の傅博が1986年に発表した「認識推理小說」という文章に、「台湾において、探偵小説への認識は、この30何年間、まだ第二次世界大戦時期に留まっている」[9]とコメントしている。

翻訳の推理小説も、1970年代から1980年代の後期までは、ブームを起こした。特に日本の推理小説は、80年代の初頭から現在にわたっても台湾の読者に歓迎されている。90年代からは約10年間の衰退期はあるものの、それを除けば、日本の推理小説は概ね台湾で広く読まれていた。傅博によれば、1986年から1988年までのわずか3年間で日本の推理小説は台湾で200冊以上翻訳出版されたという[10]。もちろん、欧米の推理小説もこの時期に多く翻訳されたが、欧米の翻訳推理小説は本論の趣旨といささかかけ離れるので詳しい説明を省く。

前に触れた林佛兒という人は、台湾の重要な推理小説作家だけではなく、出版社「林白」の経営者でもある。彼は1969年に出版社を通して松本清張の『ゼロの焦点』

の中国語版を出版して以来、1990年代初期までの約20年間、多くの日本推理小説を台湾で出版した。

また、彼が1984年11月に創刊した雑誌『推理』[11]は、1980年代後期からの約20年間、台湾での唯一の推理小説専門誌とされる。この雑誌は、外国の翻訳作品だけではなく、台湾人が創作した作品も積極的に載せるので、台湾の推理小説界に多大な影響を与えた。当時の台湾には林佛兒以外、推理小説を書く作家は一人もいなかったので、林佛兒は司馬中原、鄭清文など純文学作家に原稿を頼み、かなり苦心した[12]。余心樂、胡柏源、葉桑、藍胥など、後の台湾の重要な推理小説作家の殆どは、この雑誌に作品を発表していた。林佛兒は、台湾の推理界の先駆者として最も重要な人物とされるだろう。

翻訳の推理小説は、その後も台湾で歓迎され続け、今日に至る。台湾人作家の推理小説は、大衆文学の主流になるのはまだ遠いが、書き続ける作家も何人かいる[13]。

三、松本清張文学の台湾における受容

松本清張が台湾において、どういう風に受容されたか、資料により分析を試みる。以下、筆者が作ったいくつの表を先に提示する。まず、表1は、松本清張の作品が台湾に出版されることに関連性のある出来事を列挙した年表である。表2は、台湾で出版された松本清張の作品を年代順に並べたものである。表3は、台湾の新聞に連載された松本清張の作品を年代順に並べたものである。表4は、台湾の新聞に松本清張をテーマにした記事を年代順に並べたものである（これは主に2000年以前のもの）。また、新聞記事に関しては、『聯合報』・『聯合晩報』・『中國時報』・『民生報』・『中央日報』・『經濟日報』の6紙にとどまり、他の新聞紙の記事は未収録である。

表1　松本清張と台湾

40年代	1945年　第二次世界大戦終結。台湾における日本殖民時代が終わる。 1946年　中華民国政府が台湾で日本語の使用を禁止する。 1949年　中華民国政府が台湾に撤退、戒厳令を実施する。
50年代	1951年　松本清張のデビュー作「西郷札」が直木賞候補作となる。 1953年　松本清張の「或る『小倉日記』伝」が芥川賞を受賞。 1958年　日本で「点と線」、「眼の壁」が出版されベストセラーとなり、松本清張も一躍して人気作家になる。 ※50年代に台湾で出版される日本の翻訳小説は僅か14冊。阿部公房、井上靖、谷崎潤一郎、夏目漱石、三浦綾子、江戸川乱歩など。 ※50年代に台湾で出版される松本清張の作品はない。

60年代	1961年　松本清張の「砂の器」などの作品が続々日本で出版され、いずれもベストセラーとなる。また、国税庁の発表で松本清張は所得額作家部門で一位となる。 ※60年代に台湾で出版される日本の翻訳小説は約86冊。 ※60年代に台湾で出版される松本清張の作品は2冊。
70年代	1971年　中華民国が国連から追放される。 1972年　日本と中華民国が国交断絶。 1974年　「砂の器」が日本で映画化される。 ※70年代に台湾で出版される日本の翻訳小説は約133冊。 ※70年代に台湾で出版される松本清張の作品は8冊。
80年代	1981年　18回の「金馬奨」（台湾独自の映画賞）のサブイベントとして2日間の映画鑑賞会が行われ、「砂の器」が上映される。 1985年　1月に「砂の器」の映画が台湾の映画館で1ヶ月間ほど上演する。 1987年　戒厳令が解除される。 ※80年代に台湾で出版される日本の翻訳小説は約448冊。 ※80年代に台湾で出版される松本清張の作品は40冊。
90年代	1992年　松本清張死去。 1994年　中國時報がイベント「1994文学電影節」の一環として「松本清張週」を企画し、紙面に紹介の記事を載せ、座談会や「砂の器」、「霧の旗」などの映画上映会を開いた。 ※90年代に台湾で出版される日本の翻訳小説は約486冊。 ※90年代に台湾で出版される松本清張の作品は6冊。
2000年以降	※2000年から2002年まで台湾で出版される日本の翻訳小説は約127冊。 ※2000年から2009年まで台湾で出版される松本清張の作品は20冊。 ＊この年表を作るに当たり、日本文学小説が台湾に出版される数については、高幸玉『日本小說在台灣的翻譯史 1949-2002』（台湾輔仁大学大学院翻訳学研究科前期課程学位論文、2004年）によるものである。また、松本清張の経歴についての記述は、岩見幸恵「松本清張年譜」（『松本清張事典』勉誠出版、1998年6月）を参考にしている。

表2　台湾で出版された松本清張の作品（年代順）

年代	翻訳名	原作名	出版社	翻訳者
1960年以前：なし				
1960年－1969年（2冊）				
63年	點與線	点と線	黎明	方圓客
69年	零的焦點	ゼロの焦点	林白	邱素臻
1970年－1979年（8冊）				
77年	焦點	ゼロの焦点	林白	邱素臻
77年	共犯者	共犯者	鴻儒堂	廖清秀
79年	霧之旗	霧の旗	遠景	沈西城
79年	盲點	点と線	聯亞	東萊
79年	十萬分之一的偶然	十万分の一の偶然	民生報	朱佩蘭
79年	彩霧	彩霧	慧龍文化	朱佩蘭
79年	高中生殺人事件	高校殺人事件	林白	朱佩蘭

79年	點與線	点と線	林白	吳春和
1980年－1989年（40冊）				
80年	沙漠之死	砂漠の塩	林白	黄菊
80年	阿姆斯特丹運河謀殺案	アムステルダム運河殺人事件	林白	白沙
80年	森林之花	果実のない森	林白	朱佩蘭
80年	單身女子公寓	獄衣のない女囚	林白	朱佩蘭
80年	山之峽	山峡の章	林白	林清文
81年	水焰	水の炎	林白	朱佩蘭
81年	內海渡輪	内海の輪	林白	林清文
82年	疑惑	疑惑	林白	朱佩蘭
83年	計謀	短編集	金版	黄凰
84年	砂之器	砂の器	星光	鄭建元・梁惠珠
84年	砂之器	砂の器	皇冠	陳美雲
85年	瀟瑟樹海	波の塔	林白	朱佩蘭
85年	青春的徬徨	短編集	林白	朱佩蘭
85年	影之車	影の車	星光	梁惠珠
85年	天才女畫家	天才画の女	星光	朱佩蘭
86年	天城山奇案	天城越え	星光	鄭建元
86年	共犯者	共犯者	星光	鄭秀美
86年	女囚	短編集	晨星	葉石濤
86年	紅顏薄命	短編集	林白	葉石濤
86年	湖底的光芒	湖底の光芒	星光	劉華亭
87年	迷走地圖	迷走地図	星光	劉華亭
87年	異變街道	異変街道	星光	葉淑珍
87年	時間的習俗	時間の習俗	希代	游綉月
87年	日本的黑霧	日本の黒い霧	志文	徐沛東
87年	砂之器	砂の器	龍和	張之遙
87年	砂之器	砂の器	志文	徐沛東
87年	少女復仇記	霧の旗	志文	李紅
87年	寶藏疑雲	考える葉	志文	譚必嘉
87年	死神之網	眼の壁	志文	穆麗蕙
87年	湖畔奇案	眼の壁	志文	穆麗蕙
87年	假瘋子兇殺案	短編集	志文	陸仁
87年	詐婚	短編集（仁木悦子、夏樹静子など他の作家の作品も収録）	志文	葉石濤
87年	女作家的秘密	蒼い描点	林白	林敏生
87年	魂斷山崖	短編集	林白	朱佩蘭
87年	紅籤	短編集	志文	葉石濤
87年	宦海沉冤	中央流沙	志文	余傑超

87年	陷阱	短編集	龍和	何仁厚
88年	黃色風土	黄色い風土	林白	張杏如
88年	彩霧	彩霧	林白	朱佩蘭
89年	殺人機器的控訴	短編集	志文	鍾肇政
1990年－1999年（6冊）				
90年	熱之絹	熱い絹	林白	林敏生
91年	青春的徬徨	短編集	志文	鍾肇政
91年	賣馬的女人	短編集	志文	鍾肇政
94年	犯罪的沈淪	短編集	萬象	傅君
94年	點與線	点と線	萬象	東萊
94年	霧之旗	霧の旗	萬象	沈西城
2000年－2009年（20冊）				
06年	點與線	点と線	獨步文化	邱振瑞
06年	零的焦點	ゼロの焦点	獨步文化	張麗娴・黃盈琪
06年	砂之器	砂の器	獨步文化	邱振瑞
07年	松本清張短篇傑作選	短編集	獨步文化	劉子倩
07年	黑革記事本	黒革の手帖	獨步文化	邱振瑞
07年	歪曲的複寫	歪んだ複写	新雨	吳得智
07年	影之地帶	影の地帯	新雨	王煦淳
08年	眼之壁	眼の壁	獨步文化	邱振瑞
08年	獸之道	けものみち	獨步文化	邱振瑞
08年	黑地之繪	黒地の絵	新雨	李或嘉
08年	D之複合	Dの複合	新雨	張恆如
08年	半生記	半生の記	麥田出版	邱振瑞
08年	天才女畫家	天才画の女	新雨	吳奕姍
08年	水之肌	水の肌	新雨	吳奕姍
08年	交錯的場景	渡された場面	新雨	梁容
08年	信玄戰旗	信玄戦旗	遠流	李美惠
09年	埋伏	短編集	新雨	賈英華
09年	黑色畫集	黒い画集	新雨	蕭玉佩・燕熙・廖子愛
09年	影之車	影の車	新雨	張嘉芬
09年	壞傢伙們	わるいやつら	獨步文化	邱振瑞

表3　台湾の新聞に連載された松本清張の作品（年代順）

＊2000年以降の連載作品は未収録

年　代	翻　訳　名	原　作　名	新聞紙名	翻訳者
1960.9.17-10.8	黑底的畫	黒地の絵	聯合報	黃九
1960.12.18-1961.1.9	中宮祠慘案	日光中宮祠事件	聯合報	黃九
1961.1.13-1.29	寺島町分屍案	額と歯	聯合報	黃九
1961.4.29-10.19	黑的樹海	黒い樹海	中國時報	徐白
1966.8.7-8.19	齊人之禍	薄化粧の男	中國時報	明德
1968.6.28	法網難逃	ペルシアの測天儀	聯合報	呂茵
1982.2.28	十萬分之一的偶然	十万分の一の偶然	民生報	朱佩蘭
1984.5.22-5.28	移花接木	巻頭句の女	聯合報	朱佩蘭
1986.4.2	流逝的歲月	流れの中に	聯合報	葉石濤
1986.7.1	詐婚	支払い過ぎた縁談	中央日報	葉石濤
1986.7.25	草笛	草笛	中央日報	葉石濤

表4　台湾の新聞に松本清張をテーマにした記事（年代順）

＊2000年以降の記事は未収録

刊行日	記事のタイトル	新聞紙名	作　者
1961.8.3	每天繳七萬圓稅金的日作家　松本清張	聯合報	何明亮
1961.11.16	松本清張與女詩人	中國時報	季定
1962.4.6	推理小說在日本	中國時報	李旭鋒
1963.6.27	松本清張傳記	中國時報	蔡茂丰
1981.10.6	松本清張滿頭銀髮	民生報	李翰祥
1982.2.27	松本清張與「十萬分之一的偶然」	民生報	朱佩蘭
1991.3.10	日本四家電視台掀起松本清張熱	中國時報	小界
1992.4.2	推理王松本清張　好筆！40年不鈍	聯合晚報	林振輝
1992.5.9	松本清張手術後　已脫險	民生報	黃承富
1992.8.6	日本推理小說巨匠　松本清張　寫完自己的結局　作品膾炙人口　淡然離開人間	民生報	黃承富
1992.8.6	創立"社會派"　把推理小說帶進新境界　翻譯本在台灣銷路不壞	民生報	林英喆
1992.8.6	日推理名家　松本清張過世	聯合報	明月
1992.8.6	巨擘凋零　日推理小說家罹肝癌　松本清張去世	聯合報	陳世昌
1992.8.24	松本清張的文學　組織與　個人的張力	中國時報	李永熾
1993.5.6	名人軼事　松本清張與柏青哥	經濟日報	村夫
1994.7.24	松本清張遺書公開	民生報	黃承富
1994.9.15	松本清張其人其作　左文右史「張」揚革命	中國時報	楊照
1994.9.15	松本清張電影總評介　特寫人性與人情的顏貌	中國時報	晏翔
1994.9.15	松本清張小說VS・電影　異議的浪漫「畫」	中國時報	楊雲三
1994.9.15	松本清張創作年表　撫觸推理文學長城	中國時報	簡白

1994. 9 .15	松本清張與日本推理小說　正義・反逆・社會派	中國時報	黃鈞浩
1994. 9 .28	開卷文學電影節　今對談松本清張	中國時報	張娟芬
1994. 9 .29	隱伏的庶民聲音　松本清張的文學與電影　景翔＆楊照對談　平路主持	中國時報	景翔、楊照、平路
1994.10. 6	我所知道的松本清張	中國時報	林水福
1995. 6 .15	松本清張文學長城竣工	中國時報	劉夏如
1998. 9 . 6	「松本清張紀念館」揭幕	中央日報	陳鵬仁
1999.10.28	廿世紀日本人氣作家　每日新聞問卷調查　司馬遼太郎奪魁　松本清張次之	中國時報	劉黎兒

以下、これらの資料に基づき、分析を年代別に説明する。

1．60年代

分析を60年代から始めるのは、それ以前の時代に松本清張の作品が台湾に伝播することはほぼないと言えるからである。松本清張がデビューしたのは1951年であるが、実際人気作家になったのは1958年『点と線』、『眼の壁』の単行本が日本でベストセラーになった後である。『点と線』は、5年後の1963年に台湾で翻訳出版された。60年代の台湾は戒厳政策がかなり厳しい時代なので、これはかなり早めの出版と言えよう。60年代に台湾で翻訳出版された松本清張の作品は、この『点と線』と、1969年に翻訳出版された『ゼロの焦点』の2作品だけであるが、新聞にも松本清張の短編作品を載せた。筆者の集めた資料によれば、「黒地の絵」「日光中宮祠事件」「額と歯」「黒い樹海」「薄化粧の男」「ペルシアの測天儀」の6作品がそれぞれの新聞に連載された（表3を参照）。また、新聞メディアも松本清張について徐々にではあるが関心を持ち始めた。1961年8月3日聯合報に「每天繳七萬圓稅金的日作家松本清張」（日本語訳：税金を1日7万円払う日本人作家　松本清張）[14]という記事から始め、60年代には松本清張に関しての紹介文が4編ある。

「每天繳七萬圓稅金的日作家　松本清張」という記事には、松本清張が当時どのぐらいの税金を払ったのか、どのぐらいの収入を得たのかを細かく計算し、公表している（恐らく日本の雑誌や新聞から得た資料であるが、出所は明言されていない）。また、松本清張が毎日700枚もの原稿を書くことにも言及している。

「推理小說在日本」（『中國時報』、1962年4月6日）は、当時日本で人気のある推理作家の松本清張や高木彬光などを紹介している。「松本清張傳記」（『中國時報』、1963年6月27日）は、松本清張の生い立ちから小説が売れるまでの様々なエピソードを紹介している。「松本清張與女詩人」（『中國時報』、1961年11月16日）は、

俳人横山房子が松本清張の応援を得て俳句集を出版したことを紹介している[15]。

2．70年代

70年代には、松本清張の作品が単行本として8冊翻訳出版された。60年代の2冊と比べたら勿論増えたことになるが、その時期の松本清張の日本においての人気と出版作品数を考えたら、8冊は決して多いとは言えない。しかも、70年代に一番早く翻訳出版されたのは、1977年の『共犯者』である（同じ年に出版された『ゼロの焦点』は1969年に出版されたものの改訂版と思われる）。この低迷状況の理由として、1971年に台湾が国連から追放され、72年に日本が中国と国交を結んだことが考えられる。これらの事件により、台湾人の反日感情が一気に高まり、政府も日本映画などの輸入を禁止した。その証拠に、70年代の台湾の新聞には松本清張に関しての作品連載も紹介記事も皆無である。少し芽生えた松本清張への関心も、ここで一気に消える。しかし、この反日の風潮は長く続かなかった。70年代後期には、松本清張は台湾でブームを起こした。

3．80年代

80年代に入ると、松本清張ブームは70年代後期よりも盛んになり、いよいよ最高潮を迎えた。この80年代に台湾で翻訳出版された松本清張の作品は40冊もある。また、新聞においての作品連載や紹介記事も再び現れた。この時期に台湾で松本清張が爆発的な人気を得たのは、いくつかの理由が考えられる。まず一つ目の理由として、政府の戒厳体制が段々緩くなったためである。戦争が終わってから約30年間の平和な日々が過ぎたので、台湾と中国の関係も概ね安定状態にあり、戒厳の必要性が段々なくなったのである。実際、政府は1987年に戒厳体制を解除した。この制限の緩和により、出版社も本を自由に出版できるようになった。二つ目の理由は、1972年の国交断絶が、日本文学や映画が台湾に入りにくい一種の真空状態を作り出したのではないかと筆者は推測する。特に推理のジャンルにおいては、台湾人の作品が殆どないと言えるので、台湾の読者は飢えの状態に置かれていると言える。その証拠に、政府が1984年に日本映画の輸入禁止令を解除したのち、1985年に台湾の映画館で1ヶ月間ほど上演された「砂の器」は興行収入は2100万台湾元に登り、かなり良い興業成績と言える[16]。三つ目の理由は、正にこの「砂の器」の映画版の上映である。この映画の上映が、台湾の松本清張ブームにさらに火をつけた。そのため、1984年から1987年までの3年間に、「砂の器」の小説がなんと違う出版社に

よって4種類も出版された。

同じ小説が短期間に違う出版社によって出版されることは、日本人の眼から見れば不思議なことかもしれない。これは、当時の台湾の著作権法が外国作品の翻訳出版に制限を設けなかったために起こった現象である。つまり、当時の台湾は、誰でも外国作品を無断で翻訳出版できる状態である。単行本も、新聞の連載小説も、今から見れば盗作になるのだが、当時は違法ではないため、どの出版社も原作者から版権を取らなかったのである。松本清張ブームは、そんな時代の中に栄え続けた。雑誌『推理』35号（1987年9月）に掲載されたアンケート調査の結果によれば、台湾での日本推理小説作家の人気ランキングの中、1位は松本清張、2位は西村京太郎、3位は夏樹静子だった。また、『推理』1号から48号までの4年間で、松本清張の作品は16点も翻訳紹介され、日本人推理小説作家の中では2位を占めた（1位は夏樹静子の17点）。

4．90年代

90年代に入ると、松本清張を筆頭とする日本推理小説ブームは衰退期を迎えた。衰退の原因はおそらく、1993年に著作権法が改定されたためであろう。新しい著作権法が実施されてからは、出版社はもう無断で外国の創作物を翻訳出版できないのである。実際、90年代に翻訳出版された松本清張の単行本小説は6冊しかない。また、新聞に連載される松本清張の小説が一つもないのも、ここに原因があると思われる。小さな出版社ならいざ知らず、新聞社が違法なことをするわけにはいかない。しかし、一方で新聞には松本清張に関しての報道記事がかなりの量があった。

「松本清張手術後　已脱險」（『民生報』、1992年5月9日）には、松本清張が手術を受け、その後の容態は安定していることを報道した。同じ年の8月6日のいくつかの記事は、松本清張の死去を報道している。「松本清張遺書公開」（『民生報』、1994年7月24日）には、松本清張の遺書を一部公開している。「松本清張文學長城竣工」（『中國時報』、1995年6月15日）には、松本清張記念館の成立を報道している。

このように、松本清張の死去が報道されたし、記念館の成立も報道された。また、『中國時報』は1994年にキャンペーン活動「文学電影節」の一環として「松本清張週」を企画し、紙面に松本清張の紹介記事「松本清張其人其作　左文右史「張」揚革命」「松本清張電影總評介　特寫人性與人情的顔貌」「松本清張小説 VS. 電影　異議的浪漫「蛊」」「松本清張創作年表　撫觸推理文學長城」「松本清張與日本推理小説正義、反逆、社會派」などいくつもの紹介記事を載せた。また、9月28日に座談会

を開く他、『砂の器』、『霧の旗』、『疑惑』、『張り込み』などの映画鑑賞会も開いた[17]。これは、松本清張が台湾ですでに高い知名度を得ていることを語っている。そのほかにも、80年代に上映された『砂の器』の映画も、90年代に入るとテレビに時々放映された。

5．2000年以降

2000年に入って、特に2004年以降は、推理小説はまた台湾で人気が出始めた。金儒農の「喧嚣以前　台灣推理小說出版概況」(『文訊』269号、2008年3月）によれば、2006年に出版される推理小説は250冊以上である（欧米の作品も含む)。また、日本の推理小説の出版を専門とする出版社「獨步」も成立された。松本清張の作品の出版数は、1992年松本氏の死去により、東野圭吾や宮部みゆきなど今時の人気推理作家には及ばないが、それでも2009年までは20冊も翻訳出版された。新聞に掲載される作品や記事もそれなりにあると推測できるが、筆者が集めた資料は2000年までなので、これは更なる調査と整理が必要である。

四、松本清張が台湾の推理小説界に与えた影響

この章には、筆者が集めた台湾人作家・出版業界関係者などのコメントや文章から、松本清張が台湾の推理小説界に与えた影響を把握することを試みる。

まず最初に挙げたいのは、本論の第二章にも紹介した林佛兒という人物である。林は、台湾で最初に中国語で長編推理小説を創作した作家であり、出版社「林白」の経営者であり、雑誌『推理』の創刊者である。この林は、松本清張から多大な影響を受けている。2007年10月3日、国立台湾文学館で傅博と林佛兒の座談会が開かれ、林は以下のように述べた[18]。

> 1970年我出了一本松本清張的《焦點》。這本《焦點》是我一位同學的父親（中略）寄來給我看的。（中略）我收到後，從早上一直看到下午，中餐都沒吃。小時候看的偵探小說，像福爾摩斯或者亞森羅蘋，都是「東方版」的，小朋友在看、很簡單的，較不吸引人。《焦點》我一看就陷進去了，之後就開始出版推理小說。
>
> 日本語訳：
>
> 私は1970年に松本清張の『ゼロの焦点』を出版させた。この『ゼロの焦点』は同級生の父親が送ってくれたのだ。（中略）本が届くと、私は朝から午後まで

読み耽り、昼飯も食べなかった。小さい頃に読んだ探偵小説、例えばホームズやアルセーヌ・ルパンなどは、東方出版社が子供向けに出版した簡略なものだから、人を引き付ける力が足りない。私は一瞬で『ゼロの焦点』の虜になり、推理小説の出版を決意した。

また、二人が林佛兒の創作傾向についてコメントを述べるとき、林は以下のように話した。

傅博剛才說我是風俗派——社會派的一支，我同意，因爲我最喜歡的推理小說家就是松本清張，在推理小說界，他是影響我最大的一個人。

日本語訳：

さっき傅博さんが私の作品を社会派の中の風俗派と位置づけたが、私はこの意見に同意する。私の一番好きな推理小説作家は松本清張だからだ。推理小説界で、私は松本清張から一番影響を受けた。

このように、林佛兒自身が松本清張からの影響を認めている。勿論、松本清張から影響を受けたと発言したのは林佛兒だけではない。以下、筆者の集めた資料に基づき、いくつかを列挙する。日本語訳は、すべて筆者による。

藍霄（作家）：

已經記不得確實的日期了。不過，應該是 1984 年 10 月左右，除了金庸、古龍的武俠小說外，甚少閱讀課外讀物與參與文學活動的我，當時是就讀高雄中學三年級，在等待火車發車時刻到來的某天，隨性在學校旁邊的書店，用了身上僅有的零用錢，第一次購買了松本清張推理小說《砂之器》（星光）。

（中略）

買書的當晚，我就把上下兩冊的《砂之器》給看完了，誰管它明天要考什麼試呢？看完小說的當刻，我只有一個簡單的感想：「啊，真是好看的小說。」

隔天放學的空檔，我背著書包在書店特意尋覓松本清張其他小說，現在回想起來，是相當有意思的影像。

當時市面上只找到了《霧之旗》（遠景）與《十萬分之一的偶然》（明生報）。

如果這兩本小說不好看，寫得抽象異常、乏味難懂，或許現在的我就不是這個會把推理小說閱讀當作生活習慣必備項目的我。

日本語訳：

日付ははっきり思い出せないが、たぶん1984年の10月辺りだ。当時の私は高雄中学の三年生で、金庸や古龍の武侠小説を除けば殆ど教科書以外の本は読まないし、文学活動にも参加しなかった。ある日、私は電車の時間を待っている間に、ぶらりと学校の近くの本屋に入り、少ないお小遣いを使って、初めて松本清張の推理小説『砂の器』（星光出版社）を購入した。

（中略）

本を買ったその夜、私は上下二冊の『砂の器』を一気に読破した。明日の試験なんか、もうどうでもいい。読み終わった後の感想はシンプルだった。「ああ、なんて素晴らしい小説」

次の日の放課後、私は学生鞄を背負い、本屋に入って松本清張の他の作品を漁った。今思い返せば、あれはきっと面白い光景だっただろう。

あの時、私が見つけたのは『霧の旗』（遠景出版社）と『十万分の一の偶然』（明生報出版社）だった。

もしこの二冊の小説が退屈で、内容が抽象的すぎて、つまらなくて分かり辛かったら、今の私はきっと推理小説の鑑賞を日常生活の習慣にしていないだろう。

藍霄「台灣推理小說與我」（『文訊』269号、2008年3月）

杜鵑窩人（推理評論家）：

我開始接觸推理小說的時候，可能還沒有「推理」這個名詞，應該叫偵探小說。記得自己第一本買到的推理作品是松本清張的《點與線》，然後又看了《零的焦點》。彼時台灣引進的推理小說少得可憐，也沒得分門別類；再者因爲升學壓力的關係，更幾乎沒有閱讀的同好，所以多半都是處於自己閱讀的狀態。

日本語訳：

私が推理小説を読み始めた頃には、「推理」という名称ではなく、探偵小説と呼ばれていた。私が初めて買った推理作品は松本清張の『点と線』、その後『ゼロの焦点』も読んだ。あの時、台湾に入る推理小説はまだ少なく、作風の分類などもされていなかった。私は受験勉強の身のため、殆ど一緒に読む仲間がなく、一人で読んでいた。

陳瑊分「因爲有謎，所以迷人！資深推理迷的回眸與告白」（『文訊』270号、2008年4月）

陳蕙慧（出版社「獨歩」の編集長）：

某次看了野村芳太郎導的松本清張電影《砂之器》，氣勢澎湃，讓我有很大的震撼，而後找出原著小說來閱讀，自始正式進入推理小說的領域。

《砂之器》算是社會派推理小說，當時台灣的推理出版，也以社會派推理作品爲主，不只松本清張，像是森村誠一、夏樹靜子、土屋隆夫、高木彬光等等，都被大量引進，那是一個還滿輝煌的時期。推理小說與一般小說有截然不同的特性，它們具有很高的娛樂性，很容易吸引讀者一路追下去，培養出閱讀的喜好。

日本語訳：

ある日、私は野村芳太郎監督、松本清張原作の映画『砂の器』を観た。私はその力強さに心を打たれた。その後は、私は原作の小説を読み、推理小説の世界に入り込んだ。

『砂の器』は社会派推理小説であり、当時の台湾の推理小説の出版も、社会派推理作品が中心だった。松本清張以外にも、森村誠一、夏樹静子、土屋隆夫、高木彬光などの作品も出版され、それなりに賑やかな時代だった。推理小説は一般の小説とは違い、極めて高い娯楽性を持ち、読者を引き付けて読書の習慣を身に着けさせる力がある。

陳瑔分「因爲有謎，所以迷人！資深推理迷的回眸與告白」

（『文訊』270号、2008年4月）

傅月庵（作家）：

早在80年代，松本清張的作品便曾因「土曜日劇場」、電影《砂之器》等而風靡台灣，掀起一股推理熱潮。甚至我們可以說，日後台灣推理小說這一類型閱讀的確立，松本清張的作品絕對是不容忽視的一股推動力。

日本語訳：

松本清張の作品は80年代から「土曜ドラマ」、映画版『砂の器』などによって台湾を風靡し、推理ブームを引き起こした。台湾においての推理小説というジャンルの確立は、松本清張の作品が後押しをしていることが言えよう。

傅月庵「巨匠的魅力　讀『松本清張短篇傑作選』」

（『文訊』262号、2007年8月）

葉桑（作家）：

回國之後，因爲偶然的機會，在新竹科學園區的視聽中心欣賞了《砂之器》，（中

略）於是把中文翻譯的松本小說集，或買或租地一本一本讀下去。就在我讀到第六或第七本的時候，自己也投入推理小說創作。而松本的那一本就是《阿姆斯特丹運河謀殺案》，筆觸非常血腥，重疊式的破案手法並沒有在其他的作品出現，可惜沒有被拍成電影。

日本語訳：

台湾に帰った後、偶然のきっかけにより、私は新竹科学園区の視聴センターで『砂の器』を観た。（中略）その後松本清張の翻訳小説シリーズを買ったりレンタルしたりして読み続けた。六冊目か七冊目を読んだ後、私は推理小説を書き始めた。直前に私が読んだ松本の作品は『アムステルダム運河殺人事件』だった。この作品の描写はかなり残酷で、重なるような謎解きの手法も他の作品には見られなかった。映画化されなかったのは残念なことだ。

葉桑「我親眼看見松本清張」（『中國時報』1994年9月15日）

楊照（作家）：

（前略）因爲我是個松本清張迷，我覺得喜歡松本清張爲什麼還要問爲什麼呢！松本清張的小說以及他整個人，對我的意義是一種傳奇，一個人完成一場革命；他的小說傳達的是大眾的、庶民的聲音。

日本語訳：

（前略）私は松本清張のファンだから、松本清張を好きになるのは理由が要らないと思う！松本清張の小説も、その人間自体も、私にとっては一種の伝説だ。彼は一人で革命を成し遂げた。彼の小説は大衆の、庶民の声を伝えようとする。

張娟芬「隱伏的庶民聲音　松本清張的文學與電影　景翔＆楊照對談　平路主持」（『中國時報』1994年9月29日）

五、まとめ

本稿は、資料に基づき、台湾における推理小説という文学ジャンルの発展過程と状況、松本清張とその作品が実際に台湾に伝播・受容される状況、そして松本清張が台湾の推理小説界や台湾作家・文化人に与えた影響を分析・考察した。松本清張は林佛兒をはじめ、推理作家に限らず何人もの台湾の作家や重要な文化人に影響を与えていることが分かった。また、映画版の『砂の器』がきっかけに松本清張の作品を読み始めた人もいる。これは、松本清張作品の魅力は勿論のこと、80年代の、

戒厳の解除に少しずつ近づき、開放的な社会になりつつある台湾は、日本からの作品、特に推理小説や映画のような娯楽性の強い作品を強く求めていたことも理由の一つと思われる。松本清張の作品によって、台湾人読者は推理小説の面白さを知った。

勿論、欧米の推理小説の影響や他の日本人作家の影響も無視できないが、林佛兒のような台湾推理小説界の先駆者や、藍胥のような重要な推理小説作家が松本清張から多大な影響を受けていることから、敢えて台湾の文壇に一番影響を与えた日本推理小説作家を挙げるなら、それは松本清張であることは言えるであろう。松本清張の作品に心を打たれた人々が、今現在も日本の推理小説を歓迎する風潮の土壌となっているに違いない。

〔注〕

(1)　原題名は「The Murders in the Rue Morgue」、1841年に雑誌『Graham's Magazine』4月号に掲載。この作品が世界初の推理小説であることは、多くの文献に言及される。例えば八木敏雄「ポオ　解説」(『ポオ／ホーソン』世界文学全集32、講談社、1974年9月)や小川和夫「解説(ポオ)」(『ポオ　ポオドレール』筑摩世界文学大系37、筑摩書房、1973年11月)などを参照。

(2)　傅博『謎詭. 偵探. 推理 日本推理作家與作品』(獨歩出版社、2009年3月)、呂淳鈺「新大眾娛樂　台灣日治時期偵探小說淺介」(『文訊』269号、2008年3月)、陳國偉「本土推理. 百年孤寂　台灣推理小說發展概論」(『文訊』269号、2008年3月)などを参照。台湾の初めての推理小説について二通りの説があるのは、探偵実話や犯罪実話のような、犯罪経緯や警察の捜査過程の描写に重点を置いた作品は推理小説と言えるかどうかという観点の違いによるためである。

(3)　傅博『謎詭. 偵探. 推理 日本推理作家與作品』(獨歩出版社、2009年3月)を参照。

(4)　葉步月『白昼の殺人』(台灣藝術社、1946年12月)。

(5)　文学政策については陳國偉「本土推理. 百年孤寂　台灣推理小說發展概論」(『文訊』269号、2008年3月)や傅博『謎詭. 偵探. 推理 日本推理作家與作品』(獨歩出版社、2009年3月)などを参照。

(6)　戒厳政策とは、「台湾省戒厳令」のことである。1949年、中華民国政府は中国共産党との戦争が不利になりつつあるため、台湾で戒厳令を実施し、1987年の解厳令の解除まで38年間も続いた。戒厳令時代にはいろんなことが制限され、本

の出版も「戒嚴期間新聞雜誌圖書管理辦法」という法律の元で管理・監視される。

（7） 金儒農「喧囂以前　台灣推理小說出版概況」（『文訊』269 号、2008 年 3 月）を参照。日本語訳は筆者による。

（8） 林佛兒『島嶼謀殺案』（林白出版社、1984 年 2 月）

（9） 傅博「認識推理小說」（『文訊』26 号、1986 年 10 月）を参照。日本語訳は筆者による。

（10） 陳瀅州「推理小說在台灣　傅博與林佛兒的對話」（『文訊』269 号、2008 年 3 月）を参照。

（11） 雜誌『推理』は、1984 年 11 月に創刊され、2008 年 4 月に最終号を迎えた。陳國偉の「本土推理．百年孤寂　台灣推理小說發展概論」（『文訊』269 号、2008 年 3 月）によれば、この雜誌の影響力は 1990 年代中期以降段々衰えた。

（12） 林佛兒「一顆孤單又輝煌的寶石ー推理小說的必竟之路」（『鹽分地帶文學』19 号、2008 年 12 月）を参照。

（13）「台灣推理小說目錄及提要」（『文訊』270 号、2008 年 4 月）によれば、1980 年から 2007 年までの 27 年間で、台湾に出版された台湾人作家の推理小說はたったの 82 冊である。平均 1 年間 3 冊だけであり、しかもベストセラーになった作品は一つもない。

（14） 日本語訳は筆者による。

（15） 記事によれば、松本清張は昭和 12 年、29 歳の時に盲腸炎で入院し、手術を受けたが、当時の医師は俳人横山房子の夫の横山白虹であり、しかも当時まだ貧しい生活を送っている松本清張は医療費用の延納を認めてもらえた。松本清張はずっとこの恩を忘れず、有名な作家になった後、横山白虹の妻の横山房子の俳句集の出版に力を注いだ。

（16） 興行収入に関しては『中國時報』1986 年 4 月 19 日の新聞記事による。

（17） 座談会の内容はまとめられ、「隠伏的庶民聲音　松本清張的文學與電影　景翔 & 楊照對談　平路主持」というタイトルで翌日の 1994 年 9 月 29 日に『中國時報』に載った。映画鑑賞会は 9 月 21 日から 28 日までの一週間継続され、『天城越え』、『眼の壁』、『ゼロの焦点』、『影の車』、『疑惑』、『砂の器』、『張り込み』、『霧の旗』の 8 作品が上映された。

（18） この座談会の題目は「推理小說在台灣」（日本語訳：台湾における推理小説）、副題は「解嚴 20 年後的台灣推理小說的發展」（日本語訳：戒厳解除 20 年後の台湾推理小説の発展）。陳瀅州「推理小說在台灣　傅博與林佛兒的對話」（『文訊』269

号、2008年3月）に収録される。日本語訳はすべて筆者による。

（り　げんか／本学大学院生）